

マザー・テレサ、ベテルの人々に共通しているのは、あるがままの命を愛し、仕え続けた点です。ヨハネの手紙4章7〜12節に、『神は、独り子を世にお遣わしになりました。…わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して』くださいました、とあります。神様が私たちを愛してくださいましたように、私たちにも愛のわざをなす力があると気づかされます。しかし、軸足が揺れない強さがなくては実行できません。

日本では年ごとに若者の数が減少し、2020年を区切りに全世界に占める高齢者の二人暮らし、一人暮らしが増加します。高齢者がお荷物のように扱われ、排除されることがあれば、日本は活力を失っていくでしょう。若い人が「生きていて、社会に参画してよかった」と実感できる社会が必要です。「頼れる人がいない」と感じる一人暮らしの高齢者を、自分の住む地域社会の縁の中で支えることで、その地域は安心感と安定感、信頼に満ちていくでしょう。一人ひとりの力が、地域の中で発揮されることが大事なのです。

家庭状況も大きく変化しています。単身世帯と一人親家庭が増加し、非正規雇用労働者も増加しています。保育園に通う子どもの中には、月曜日の登園時、おむつにたくさんのおんちを包んでくる子がいます。親の育て方を問題にする前に、安定した職業に就けず、経済的貧困を補うために2、3の仕事を抱える人たちがいる実態を心の中に留めてください。時間的貧困で子どもに関われない親たちを包み込む気持ちで、しっかり子どもを受け止めてほしいと思います。集団保育、集団教育の中に、「いと小さき者のために」という精



神を持ち、何が出来るだろうと仕事を続けていく一人ひとりでありたいと心から願います。どのようないきさつで産まれてきた赤ちゃんであっても、命を寿ぐ時代にきています。中絶という選択肢にさらされることのないような社会にすることも大事でしょう。

自らの立つ場所と地球の持続とのつながりを考える

人間だけでなく、周辺にある様々な命の連鎖が絶たれています。私たちは時として人間の命が上で、鳥や獣、花などは下だと錯覚します。シュバイツァーは、「私たちは生きようとする生命に囲まれた、生きようとする生命だ」と言っています。県知事時代の川辺川ダム問題では、ダム建設にあたって世界に例を見ない希少な微生物を移転させる話が出ました。しかし学者からは、

微生物の再現は難しいと伝えられました。ダム底に住むミミズ、ヘビなども絶滅すれば、食物連鎖のシンボルの一つと言われるクマタカも生き続けられなくなりそうです。ミミズの命を惜しめないことが、私たちの命を否定することにつながっているのです。

高度経済成長時代の日本の農村社会からは、現金収入を求める男性たちが都会へ出て行きました。じいちゃん、ばあちゃん、母ちゃんの「さんちゃん農業」が営まれた結果、農村文化が廃れ、

食生活がだめになり、過疎化が進みました。カロリーベースで50%、これが私たちの食料状況です。ほとんどを輸入に頼り、「自分たちが食べる」という営みさえ、私たちの国はできなくなっています。

2003年に国連は「水は基本的人権の一つである」としました。しかし、世界の5人に1人が安全な水を飲めず、5人に2人は下水や排水を真水にする設備がなく、毎日6000人の子どもが下痢や感染症など、水関連の病気で命を落としています。また、地球温暖化は土壌の劣化を進めています。これが地球の状態です。多様な民族、異なる国家が混在する地球で、各国の利益追求が複雑に絡み、戦争が起こっています。私たちが立つ場所から世界を見渡した時、これらの問題と、地球を持続可能なものにしていくこととのつながりを考えなければなりません。地球には、自然が危機を迎えているという信号が点滅しています。

身近にある問題や出来事に苦痛を抱えている人たちに対し、身近にある自然破壊に対し、手をこまねいたり、人に任せたりしては、私たちの宇宙そのものが持続できなくなります。まず、一人ひとりが隣人の存在に目を向け、「何が出来るだろう」と祈り、考え、行動することです。隣人ともに持続可能な宇宙をつくる役割を担わせてくださいと願っている日々でありたいものです。

命について皆さんと一緒に考える時を与えられ、命により添うことが私たちの責務であると共有できて、うれしく思います。私自身もそのような道しるべをしっかりと立てながら歩み続けたいと考えています。

参加者の感想の一部をご紹介します

- ・ 胸に響く、すばらしい講演でした。
- ・ 政治がだめ、行政がだめ、社会がだめ、ということではなく、一人ひとりが社会にどう貢献するかを考えるべきだというメッセージが心に響きました。
- ・ 自分の周りで起こっていること、目の前にいる人の存在に関心を持ち、手を差し伸べることの大切さを改めて考えました。
- ・ 命を大事にするということは自分たちだけでなく、周りや隣人を大事にすることだと気づかされました。
- ・ 講演を聴き、隣りの人のために私でも小さい力を注げるかもしれないと勇気が出ました。
- ・ 愛を持って支え合っていかなければ社会全体が弱体化していくことを改めて感じさせられました。
- ・ 物事をあらゆる方面から見ると思解く力を身につける必要があると思いました。
- ・ 命を育む大切さ、自然と命の連鎖について改めて考えさせられました。
- ・ クリスマスを迎えるこの時期に、私たちに与えられた大切な生命に寄り添うことの意味を考える機会を与えられ、感謝です。
- ・ 地域でのつながりが大切だと感じました。私も地域での活動に参加して少しでも役立ちたいと思います。
- ・ 家族とのつながりと同様、私たちが社会や地域とのつながりを持つ義務がある、そしてその一員として役割を担う必要があると感じました。
- ・ 次代を担う子どもたちをどう育むか考えるきっかけになりました。

地域と共に「防災を考える日」

熊本YMCAの「共に生きる社会づくり3カ年計画」の一つとして、支援合うコミュニケーションの創出を目指し、ながみねファミリーYMCAとそれを支える熊本ひがしワイズメンスクラブ。人々の孤立が進む社会の中で、YMCAが地域のつながりを強める場となり、より安全で住みよい地域社会と人間関係を築くことを願って、活動を続けています。

1月16日(日)、「絆でつくる、『安心・安全町づくり』を実施。消防署や警察署、日本赤十字社、NTT西日本九州、自治会、阿蘇火山博物館など各団体の協力を得て、炊き出し訓練や初期消火体験、災害シミュレーション講習など、防災にまつわる様々な取り組みが行われました。当日はYMCAのボランティア、地域住民ら約200名が参加。子どもたちもはしご車搭乗体験や、火山活動や地殻活動と地震のメカニズムについての講話などを通して、防災への意識と関心を高めました。

